



Title	間身体的表現と認知症の主観性
Author(s)	シエル, リサ・フォークマーソン
Citation	臨床哲学. 2018, 19, p. 173-205
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68171
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

間身体的表現と認知症の主観性

リサ・フォークマーソン・シェル (Lisa Folkmarson Käll)

認知症の人は関係という観点で理解されなければならない。関係が彼らに残されたすべてだからではなく、私たちの生のすべてにとって特徴的だからだ¹。

序論

様々な種類の認知症、とくにアルツハイマー病は、たぶん加齢に関わる最も恐れられていることを私たちに示している。西洋の文化と大衆の言説は、認知症の状態が自己と同一性の容赦のない消失または喪失に、そして身体の死に先立つ精神の死に導く、という恐ろしい見解に支配されている²。しかし、最近の認知症研究では、認知症の人々を人格の消失や自己性の喪失という観点で捉える見方が深刻に疑問視されるようになってきている。そして現在では、認知症に苦しむ人々もまだ人格を保っており自己性の肝心な側面を保ち続けているという認識が広がっている。自己は本来的に関係的なものとして理解され、同一性と自己性が他者との相互作用を通して維持される様々な仕方に注意が向けられるようになってきている³。このような認知症研究の焦点の移動は、認知症の状態がどのように自己性や主観性に影響するかを理解に対して有意義な改善を引き起こす一方、主観性の理解の仕方や、世界の内でそして他者との関わりにおいて自己であるとはどういうことなのかについて、注意深い考察を呼び起こしてもいる。以下で私は、認知症の主観性の探求に向けていくつかの段階を踏むと同時に、主観性についての関係的な土台をより一般的な観点から考察することにもなる。より明確に言うと、モーリス・メルロ＝ポンティの哲学の中で述べられてきたような間身体性 (intercorporeality) についての見解を、主観性の構成におけるその操作的かつ形成的機能に焦点を当てながら議論することにした。私は個々の受肉が間身体的になることを、受肉した自己が継続的に生まれいずる状態 (in statu nascendi)^(訳注1) で出現する絶えざる表現の過程として取

り出すつもりだ。この過程は、受肉した自己の境界が相補的ではあるが対称的ではない間身体的な交換において、描かれては描きなおされ、補強され、試され、定着させられては再び定着されるような、一つの変質である、というのが私の主張となる。

クリスティン・ツァイラーが間身体的能力（ないし潜在能力 *capability*）^{（訳注 ii）} と呼ぶものを引き起こすような、認知症ケアにおける共同活動のケースについての彼女の分析に向かうことから始めよう。ツァイラーと歩調を合わせて、個々人はそれぞれ独立してただ外的にのみ関わり合うだけの原子論的な存在ではなく、互いにかみ合っていて、互いに関わり合う中でそうであるものに絶えずなっていくのである限り、すべての能力は間身体的だと私は提案したい。原子論的な自律の観点で自己を概念化することへの異議を唱えることで、間身体性という考えは認知症に関する主観性に迫るための重要な資源を提供してくれる。さらに、認知症における相互作用の例は、すべての相互作用を基礎づける、受肉した自己と世界との間の基本的な結びつきを明らかにしてくれるような光を提供することができる、と私は主張したい。実際、ヒューズ、ロウ、サバトが上の引用文で書いているように、認知症の人が関係という観点で最もよく理解される理由は、関係が彼らに残されたすべてだということではなく、実際に関係が人間存在のすべてを特徴づけるものだということなのだ。したがって、認知症のケースは、人間存在の一般的な構造について、それを拡大されたかたちで示すことによって、何かを言うことができるのだ。

間身体的能力

認知症に関わる人格性を議論する中で、クリスティン・ツァイラーは、間身体性という考え方が表現と相互作用の能力という観点で何を可能にすることができるか、という点に注意を引こうとしている⁴。ツァイラーは主に彼女が熱心に面と向かい合う間身体性と呼ぶものに関心を寄せている。それは「自己と他者が互いに熱心に意識し、つながり合い、反応し合う」ような状況を指している。彼女は間身体性のこの形式を原初的（*primordial*）^{（訳注 iii）} 間身体性から区別する。こちらは自己と他者の間の基礎的な身体的開放性を指しており、「他者

との社会的な関係によって構成されるような自己にとっての土台として役立つ⁵ものである。このような原初的な間身体性は、面と向かい合う間身体性にとって基礎的ではあるが、ツァイラーが表立って議論するのは、後者の方である。認知症ケアにおける音楽的相互作用のケースを示す映像の一場面の現象学的分析を通して、共同活動のそうした相互作用や熱心に向かい合う間身体性が間身体的能力を引き起こすことをツァイラーは主張する。その一場面とは、セラピストのナオミ・フェイルが 87 歳のグラディス・ウィルソンとの会話を始めようとしているところを示している。ウィルソン夫人はアルツハイマー病と診断され実質的に話すことができないと言われていて、目を閉じて座った椅子のひじ掛けに向けてリズムカルに彼女の手を動かし、同じように足も少し動かしている⁶。フェイルはキリスト教の音楽を歌い始める。彼女が知るところ、それはウィルソン夫人にとって人生を通して大切なものだったからだ。すると、ウィルソン夫人は手の動きをフェイルが歌うのに同調させる。ウィルソン夫人は音楽に入り込むにつれ主導権を握るようになり、より速くより力強く手を叩き、それに合わせるようにフェイルはウィルソン夫人が手を打つペースに従ってより大きな声でより速く歌うことになる。歌が終わりに差し掛かり、フェイルが「彼は全世界を得た (He's got the whole world)」と歌い出すと、今度はウィルソン夫人がフェイルに代わって囁くような声で「彼の手に (in his hands)」と応じた。彼女たちは一緒に歌を終え、ウィルソン夫人はペースを遅くして再び椅子のひじ掛けをリズムカルに叩くようになった⁷。

この一場面に示されたグラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの共同音楽活動の分析に基づいて、彼らが姿勢、接触、アイコンタクト、動きを通してそれぞれを表現することで、身体的な主観^(訳注 iv)が「ダイナミックな間身体的な関与の共有空間を創り出し」、その中で、歌ったりリズムに関与したりする能力のような、彼女が言うところの間身体的能力が生み出される、とツァイラーは論じている⁸。彼女によれば、そのような能力は、「音楽の一部を成す性質や構造のような世界の特徴と、一緒に音楽の一部を表現し作る自己と他者との間で実現される」⁹のである。さらに、間身体的能力はある特殊な相互作用や共有された空間の外側に存在するものではなく、したがって、ツァイラーの議論においては、関係するばらばらの個人というよりむしろ、「自己-他者-世界の相互

作用のもつ属性」としてよりよく理解されることになる。グラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの間の共同音楽活動は、確かにいくぶんは、特殊な状況と活動において互いに相互作用する仕方についてのあらかじめ形成されたそれぞれの間身体的記憶によって可能になっているのではあるが、まさにその活動自体が、この相互作用の外側ではありえないような仕方で、それぞれを表現することを可能にしているのだ、ということをツァイラーは強調している。

グラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルのケースはおそらく、明らかに間違いようもなく非対称なものであることはいくら強調しても足りないだろうし、このことはまたツァイラーが注意深く指摘していることでもある。フェイルとはっきり対照的に、ウィルソン夫人はかつてできていたことがもはやできない。アルツハイマー病という彼女の状態のゆえに、そしていくぶんかは彼女の進行した加齢のゆえに、彼女は日々のケアと支援を必要としている。さらに言えば、フェイルは単にウィルソン夫人との音楽活動に関与しようとしているだけでなく、彼女を活性化しようという明らかな治療の意図をもって相互作用に入っている。フェイルの側のこの意図が、この場面を設定し、彼らの相互作用の方向を決めているのだから、それが重要ではないわけではない。自己・他者の共同活動において飛び出した間身体的能力が、「他者の支援なしには自分を表現できない個人に、相互作用の中で表現ができるようにするのだ」とツァイラーは強調する¹⁰。だから、ツァイラーが論じているように、或る能力は二人の女性が一緒に活動しているときにだけあるように思われるが、このことが彼女の分析においては主に、実際のところおそらくもっぱら、グラディス・ウィルソンにのみ当てはまるように見える。音楽を通してコミュニケーションしはっきりと自己を表現する彼女の能力は、少なくともいくぶんかはフェイルの最初の方角づけと同様にフェイルとの熱心な相互作用の共有空間によって可能になっているからである。ツァイラーはフェイルの能力も二人の女性の間の相互作用に依存しているかどうか議論していないし、この問いは実際、映像シーンの中での関心事ではない。そうではなく、その映像は明らかに、特別な治療的関与によってウィルソン夫人のうちに眠っている潜在能力を呼び覚ますことを実証するように設定されている。

共同活動における間身体的能力の出現に対してツァイラーが用意したケース

は説得力があり、認知症ケアだけでなくもっと一般的なケアにおける臨床実践にとって間違いなく大変重要なものだろう。しかし、ここで私は焦点を移し、実は本質的に間身体的でないような能力などはないという考えを強調することにしたい。さらに、本質的には間身体的であるような能力も、間身体的な関与において形成される個々の主観によって表現されると同時に実現されるのである。私はグラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの映像シーンが、共同活動と共有された状況の中で、そしてそれを通して能力が出現することを示している、というツァイラーの主張を共有するものであるが、私がその映像シーンについて最も注目すべきと考えるのは、この二人の女性の間の特別な相互作用の中で起きたことではなく、むしろ、この特別な状況の中での相互作用が実はどこまで日常的な相互作用を反映しているか、ということだ。私の考えでは、二人の女性の間の相互作用を例外的なものにしているのは、この相互作用が起きた特別な条件、すなわち、ウィルソン夫人の進行した病とフェイルの治療的な意図という条件なのだ。表現とコミュニケーションが実際それら自身で確かに注目に値する現象であるとしても、その注目に値する映像シーンに示された表現とコミュニケーションは、日常の相互作用とコミュニケーションがいかにして生じるかということを誇張した仕方で示しているという意味では、いくつかの点でまったく注目に値するものではない。われわれはふつうの日常的な相互作用のうちの大部分で、ウィルソン夫人のケースがそうであるように、以前に形成された能力を表現し実現するために特別な状況に置かれる必要はないとしても、にもかかわらず、これらの能力は他者や周囲の世界との関係の中に位置づけられて形成される。非対称的な条件によって特徴づけられるグラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの間の特別な相互作用と、類似の条件と能力をもつと考えられる主観同士の間での相互作用とでは、否定しようもなく非常に有意な差異がある。しかし同時に、私の考えでは、全く異なる条件を与えられつつも、互いに他者や共有されている状況に応じている映像シーンの中の二人の女性の間の相互作用は、自己と他者の間の他の多くの相互作用と重要な点で異なっていないのである。

すべての能力は間身体的であること、そしてグラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの間の相互作用が或る点ではふつうの日常的な相互作用を反映し

ていること、これらを主張するために、ここで私はツァイラーが原初的な間身体性と呼んでいるものに戻ることにしたい。これは、自己と他者の間の基本的な身体的開放性であり、その中で、そしてそれを通して自己と他者がともに存在へと至るようなものである。私もツァイラーのように間身体性の形成的な力を強調したいが、彼女の分析に加えて、彼女が記述している熱心に面と向かい合う間身体性を条件づけている身体的つながりという観点から、間身体性への注意を引くことにしたい¹¹。

構成的な間身体性

アン・ケイヒルが注意しているように、間身体性は、たいていメルロ＝ポンティの哲学とともに連想されるときでも、ニーチェ、フッサール、レヴィナス、ボーヴォワール、デリダ、ナンシーといった大陸哲学の多くの思想家の著作を貫く主題である¹²。メルロ＝ポンティの著作において、間身体性（英語では *intercorporeality* または *intercorporeity* と訳されるがもとのフランス語は *intercorporeité*）という考えは、共有された世界に埋め込まれてそれとからみ合っている身体同士の間の構成的相互接続を記述するために、後期著作のなかで登場する¹³。ダイナミックな社会的、文化的、物質的、歴史的に位置づけられていること、そして受肉の相関関係に焦点を合わせることで、間身体性は生きられる身体という現象学的な考えが深めることになる。これは自然科学にとっての対象としての身体と対照的に、主観的に生きられ経験されるものとしての身体を捉えようとするものである。メルロ＝ポンティの著作において間身体性は、身体が単にもう一つの他の身体と相互接続するだけでなく、その相互接続の中で単一で区別された身体として形成されて出現もする、ということを示している。身体はさらに、共有された世界との相互作用の中に埋め込まれその中で形成される。身体の間身体的な捉え方は、個々の身体からそれらの間の構成的関係へと焦点を移してくれる。その捉え方は、はっきりとした境界をもって閉じられたばらばらの存在としての身体という考え方に挑み、その代わりに、身体と身体の境界が絶え間なく生成することに注意を引きつけ、身体の個体化のまさに根拠としての身体的相互接続性を強調することになる。間身体性こそ

が実は身体の単一性の条件を構成している。身体同士の間境界が確立され、強化され、挑まれ、そして繰り返し変化するというなかで、単一の生きられた身体が、存在するに至るのである。間身体性という哲学的なパースペクティブからすると、アン・ケイヒルが言うように、身体は「はっきりと印づけられた原子論的な存在として」ではなく、むしろ、「社会的、政治的、人格的關係の受肉した現れとして、そしてそれらの關係の可能性の条件として」他の身体とともに同時に存在に至るもの、として概念化される¹⁴。しかし、身体の間身体的な理解が身体の間境界や差異を完全に崩壊させ、複数の身体が一つの身体になるというわけではまったくなく、ということを強調しておくことは大切だ。むしろ、そうした理解は、身体がそれ自身の肌の表面を超えていくとともに、世界、他者の身体、歴史、制度、技術、意味の領野との間身体的關係においてその境界や単一性を絶え間なく受け取ることで境界づけられた単一のものとなることに注意を引いてくれる。こうして、間身体的な生きられる身体あるいは受肉した自己は、絶え間ない差異化と変化を通して存在へと至るのである。さらに、この差異化の過程は、単に、受肉した主観が他者や周囲の世界から自己を差異化する過程であるだけでなく、同時に、その存在は自己を超えていく絶え間ない生成であるように自己差異化の過程でもある¹⁵。

間身体的に構成される生きられた身体は、メルロ＝ポンティの著作において主観と客観の統一として曖昧さという語で記述され、いわゆる二重感覚という受容力によって特徴づけられている。それは感じられることと感じることの統一なのであり、メルロ＝ポンティも言うように、「二つの葉からなる一つの存在であって、一方では、いくつかの物の中の一つの物でありながら、他方では、それらを見て触れるところのもの〔主観〕でもある」¹⁶。フッサールにしたがって、メルロ＝ポンティは二つの触れ合う手の様子を使って二重感覚の現象と経験を描写している。彼が書いているところによると、「私が左手で自分の右手に触れるとき、私の右手は一つの対象でありながら、感じることもできるという不思議な特性をもつ」¹⁷。感じることと感じられることという自己触発的構造は、私が自分に触れるとき、私は触れている私にも触れている、ということを含意している。私の一つの身体の二つのアスペクトは、交替する役割の「曖昧な配置」を表し、そのために触れられる手が触れる手になりその逆も成り立つ

ことになる、とメルロ＝ポンティは書いている。感じるものとしても感じられるものとしても現れるのは同じ生きられた身体であるにもかかわらず、身体のこれら二つのアスペクトがもう一方と同時に存在することは決してない。むしろ、そこには「私の身体を二つのものへと開く」ような、触れるものと触れられるものとの間の「一種の裂開」（メルロ＝ポンティが *écart* と呼んだもの）がある¹⁸。受肉した自己反省は「最後の瞬間でいつも失敗して、一致は実現された瞬間に欠けていく」ので、触れられた手が触れ始めると、それに応じて触れている手は触れられる役に交替することになる、と彼は書いている¹⁹。

このように、二重感覚という現象は引きつけ合うと同時に距離をとるという事態であり、私が自分を自分自身から距離をとるような仕方で自分に開かれているという事態である。触れることと触れられることの引きつけ合いは、「奪い去ると同時に距離をおいて保持するので、私は自分自身から逃げることによってのみ自分自身に触れるのだ」とメルロ＝ポンティは書いている²⁰。自分を感じることは「自分に手が届くことではなく、反対に自分から逃げることであり、自分を無視することであって、問題の自己は分岐（*divergence* 原語は *d'écart*）によってある」²¹。感じられるものとしての身体と感じるものとしての身体の間に分岐は、「対自と即自の連結」であるという統一を犠牲にすることなく私の身体を二つに分割しながらも、「私の身体の全体的存在によって架橋されている」ような開けという用語で記述されている²²。同じものの別の次元を表現しているのは、同じものの分岐であって、つまり、その内的な開放性と自己差異化のための空間なのである²³。

この分岐（*d'écart*）を解明することは私の身体に触れるものと触れられるものに分割し、その反転可能な構造を、他者性の要素が明るみに出される自己触発の構造として露わにする。私の生きられた身体の自己感覚は、私が私自身の外面性と私が他者と共有している世界に位置づけられていることに会うような経験であり、私が経験する主観であるためには他者に対してと同じく私自身に対しても経験されうるものでなければならないということが明らかになるような経験である。この点についてメルロ＝ポンティは、「自分の身体を感じることはそれが他者にとってもつアスペクトを感じることであり」、つまり、それは共有された世界の中で見られ触れられるものとして知覚されうるものだ、と

言って適切に表現している²⁴。私自身の受肉についての私の一人称的な経験は、厳密に受肉したものとして間主観的に近づくことができるようになることの経験を含んでいる、と彼は主張する。生きられた受肉は、主観的に経験されたものの秩序と間主観的に近づくことの出来るものの秩序が互いに呼び求めあい、完全に隔離されたままではありえないということを、はっきりと露わにする、と彼は書いている²⁵。私が他者を経験することのできる仕方と他者が私を経験することのできる仕方の両方を予想するような仕方で、私は私自身を経験する。私自身の受肉した自己覚知は、同時に間主観的に外部の他者へと近づくことのできるものとしての私自身の開示であり、私が他者と出会うことは私の基本的な開放性の露呈なのである。外部の他者を経験することと私自身を他者として経験することの間にヒエラルキー的な秩序はない。二つはむしろ同時的で、他者なしの自己はなく、自己なしの他者もない²⁶。

自己触発と自己差異化によって生きられた身体を記述すること、同一性を構成する要素としてその範囲内で他者性の契機を取り入れることは、孤立した対象として身体を概念化することを説得的な仕方です捨て去り、代わりに本質的に間身体的なものとしての構造に光を当てることになる。さらに、間身体性は自己と他者の間の身体的相互接続に限定されず、双方が位置づけられ双方がその部分となる共有された世界を含むところまで広がっている。メルロ＝ポンティは、身体における世界の前意識的な所有について語り、「その図式を身体がそれ自身のなかにもっているような」世界へとあふれ出るようなものとして身体を語っている²⁷。彼によれば、自分自身の生きられた身体は自己にとって、「空間のうちで横並びになった器官の寄せ集め」としてではなく、部分が「互いに含みあい」そして「共感覚的な世界における自分の姿勢の全体的な覚知」である一つの体系、すなわち身体ないし姿勢の図式として直接に現前している²⁸。身体図式は生きられた身体の統一であるが、身体のような部分と器官の統一であることに限定されず、むしろ、生きられた身体が、他の生きられた身体との関係を含みつつ、それが位置づけられ埋め込まれている世界や空間と一つになっていることを示している、と彼は主張する。私が外的な空間を捉えるのは私の身体的状況を通してであり、それというのも、私の「身体は空間の中に物のようにあるのではなく」、「空間に住みそこにつきまとっている」²⁹からである。

彼によれば、身体図式は「最終的には、私の身体が世界の内にある (in-the-world) ことを、つまり、単に現在の位置の体系としてばかりでなく、さらにそれによって、無限にある同等の位置の開かれた体系としてもあることを言明する一つの方法なのである」³⁰。したがって、身体図式によって提供される全体的覚知は、自分自身の生きられた身体を社会的、文化的、歴史的、物質的世界に空間的かつ時間的に位置づけられたものとして経験することを含んでいる。生きられた身体がこうして位置づけられていることは、実際に今ここに限定されず、存在するための潜在性という終わりのない地平へと広がっているのである³¹。

身体図式の開放性を強調することで、メルロ＝ポンティは、受肉した主観性の変わりやすい性格や絶え間ない生成に焦点を当てることになる。同様に彼が注意深く指摘するのは、身体図式が「共感覚的な世界の中での私の姿勢を全体的に覚知している」ことであるとはいえ、それは完全な覚知でもなければ、客観的な用語で捉えられ記述されうるような固定された全体なのでもない。よく知られているように、彼が主張するのは、身体の空間性が外的対象の空間性のようなものではなく、むしろダイナミックで能動的な「状況の空間性」だということである。こうして彼は、身体と世界の間にある親密な構成的な相関関係や、この相関関係がどのようにして身体空間の進行している再構成を含みこむのかということに注意を促すのである³²。たとえば、ずきずきする偏頭痛の始まりはたいてい音や光のような世界内の外的刺激を様々な仕方で出現させ、それによって、身体的空間の再構成を引き起こしがちであるが、それはおそらく、世界内での自分の振る舞いと表現に制限を課すことになる。同様にして、世界と世界内の他者が私に現れ、私の知覚、運動、行動を基礎づける仕方は、私の身体図式と私自身や世界の内での私の可能性の経験の形成を管理するようになる。受肉した自己、世界、他者の間のこうした密接した構成的な相関関係、要するに自己が形成的に位置づけられていることが、グラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの間の相互作用における間身体的な能力の出現を分析するなかでツァイラーが捉えたものであった。彼女たちの相互作用の映像シーンは、フェイルの現前がウィルソン夫人の身体的空間の再構成をどうやって含みこみ、それによってフェイルと一緒に音楽に関与するようにさせたのかということを示している。ウィルソン夫人の認知的および身体的な衰えと養護施設への拘禁が

世界内での存在の仕方を制限している一方で、彼女の動きや表現に関与し自分自身も動きや表現を見せるような他の人の現前が行動の可能性や選択肢を開いたのだ。制限と新たな可能性の両方が、身体的空間の再配置と身体図式の境界の引き直しを引き起こしたのである。

このように、間身体的なものとしての身体図式は、異なる種類の身体と異なった位置づけをされた身体との間のダイナミックな交換の中で絶え間なく形づくられ、変形され、表現されている。身体図式の境界は異なった要素、アスペクト、対象、価値として配置されては配置しなおされ、他の身体は自分自身の生きられた身体と身体図式へと組み込まれる。身体図式は肌の表面で終わるのではなく、身体の中の境界が間身体的な交換の中で確立されるように、身体的な表面と身体の形態論が生み出される表面化の過程と私たちが呼ぶであろうものに寄与することになる。これは、私たちが他者や私たちの周囲の世界に関与する、日々の生きられた経験においてよく認識することの出来るものである。世界を感じるとき、私はしばしばどこで私の身体が終わり、どこで世界が始まるのか厳密に言うことができない。はっきり引かれた線として私の身体の開始点でもあるような私の身体と世界の中の接点を感じるというより、それは感覚が終わり、再び始まるような点として表されるのである。たとえば、足の裏に暖かく湿った砂の柔らかさを感じながら砂浜を歩いていて、急に砂の中に埋まっていた鋭いものを踏んだときのことを思い浮かべよう。こういった経験は、物体相互（この場合は足、砂、鋭いもの）の間の曖昧な境界と、物的な表面同士の互いの関係における物質化とを捉えている³³。鋭いものを踏んだ時、私の肌の表面と世界とくに鋭いものの表面とがともに、サラ・アハメドの言うように、「最初に『そこにあるもの』として感じられる」³⁴。この経験において、身体と世界の中の相関関係は、身体と世界の両方がそれらの出会いをとおして生み出される相互的な生成という関係として露わにされる。一方で、世界が感覚する身体の下で展開するように、生きられた身体は世界を現出させる。同時に他方では、生きられた身体は世界の深淵のうちから出現する³⁵。メルロ＝ポンティが書くように、受肉した主観は、世界内での状況の絶え間ない展開を伴って「絶えざる誕生を繰り返し」、世界も同じように「結論を欠いた未完の仕事」と記述されるような仕方存在に至るのである³⁶。知覚の世界は疑いなく与え

られているが、それは感じられ感じることのできる私の身体との関係（そしてその展開との関係）において展開され、時をへて出現するような所与なのである。

表現の関係としての間身体性

このように、身体の間身体性は印象づけることと印象づけられることの織物として、提供し、受け取り、抵抗し、存在に至ることの織物として理解されるだろう。間身体性は形成的でダイナミックな構造であり、受肉した自己同士の間の基礎的な関係は、或る人が変化を通して誰になっていくかという、生成の進行中の過程なのである。自己と他者は「単一の間身体性の器官のようである」とメルロ＝ポンティは書いている。つまり、「他者の構成は身体の構成の後に続くのではなく」、「他者と私の身体は根源的な恍惚状態から共に生まれる」³⁷。それぞれ単一の身体がともにそこから生まれてくる根源的な恍惚状態とは、スコット・マラットが指摘しているように、メルロ＝ポンティが表現という出来事を記述し、身体同士の間の間身体的関係が彼の著作の中で表現という関係によって概念化される時の仕方なのである³⁸。ここで、私は自己と他者の間身体的な構成をさらに解明するために、表現についてのメルロ＝ポンティのいくつかの著作に立ち返ることにしたい。私は何かが何かとして出現し、意味が生まれ、いずる状態にあるような基礎づける出来事としての表現に焦点を当てるつもりだ³⁹。続く節ではグラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの間の相互作用の映像シーンに立ち返り、絶えざる生成というダイナミックな構造として表現を理解するメルロ＝ポンティに照らしてこれを考察することにする。

表現という現象はメルロ＝ポンティの著作で一貫して中心的な場所を占め、彼が主観性を再概念化するさいの鍵となっている⁴⁰。内的な思考、感情、経験を外に出すとか、公けにするとかいった言い方で表現を文字通り理解することを慎重かつ批判的な分析にさらすことによって、彼は、表現という出来事に先行し、表現が単純に身振りや言葉に翻訳するような意味などない、と主張する。そうではなく、各々の単一の表現は、その瞬間ごとにそれが表現するところのものなのである⁴¹。この「表現と表現するところのもの」同一性は、メルロ

=ポンティの表現的な身体についての説明でもおそらく最もはっきりと明らかにされている。彼が書いていることによると、生きられた身体の場合、記号は「縞模様が階級を示したり、住居番号が家を示したりする仕方」ではその意味を伝えておらず、そうではなく、「それはそれで満たされている。或る仕方ですそれはその意味するところのものである」⁴²。人間の受肉した実存は、その表現的な振る舞いによって隠された情動を指し示しているのではなく、むしろ、その身体はいつもそれが表現しているところのものである。たとえば、誰かがほほ笑んだり笑ったりしているのを私がみると、私はその笑顔の背後に隠された心理的事実としての喜びを探すことはなく、彼女の笑顔は異なる仕方異なるパースペクティブから私たち両方によって経験された喜びそのものである。メルロ=ポンティはさらに進んで、身体的な身振りと言表現的な振る舞いは主観が世界の内に存在する仕方を構成している、と主張する。主観的经验とは存在の或る仕方における身体であり、或る状況において感知された身体なのである。「悲しみの表現は悲しんでいることの一つの仕方である」と彼は書いている⁴³。したがって、私の主観的な悲しみの経験は(その質ではないとしても)私の悲しみの表現において直接見えていると言うだけでは十分でない。表現的な存在における私の身体は、私が私の感情と心の情緒的状态を経験する仕方としても認識されなければならない。世界を新しい仕方で見させるような私の目の中の熱い涙、あるいは私に話すことをさせないような喉のはれと震える唇なしには、私の悲しみは異なって経験されることだろう。

表現と(身振りや経験のような)表現されているものとの間の同一性は、メルロ=ポンティの説明によると、一方を他方へと還元することを必然的に伴うわけではない。むしろ、彼はこの同一性(表現によって経験される生きられた身体はこの統一)を自己関係性によって、それ自身のうちに他者性や差異の要素を含むものとして理解することを提案する。私たちが内部と呼ぶものと外部と呼ぶものの間の分離は、或る根源的な統一に対しては二次的であるが、この統一はそれにもかかわらず、二次的な分離によっては固定されえないような、自己差異化と不一致の種子を含んでいるのである⁴⁴。こうして、徹底的に間身体的である表現という出来事は、経験する主観性の「内的世界」と、表現する身体に近づくことのできる間主観性の「外的世界」との間の差異や落差を生み

出すことになる。内部すなわち私たちが誰であるかという主観的感覚は、常に他者と世界との関係を通して経験される。それは、一方の内的思考ないし経験と他方の外的身振りや言語とが、あたかも一方からもう一方へと公けにするかのように私たちが自分を表現する、分離された平行する領土だからというわけではない、とメルロ＝ポンティは書いている。むしろ、彼は表現という出来事を、分離した平行する秩序としてそれらを構成する、あの基礎づける出来事として記述している。メルロ＝ポンティは平行論と二元論の弱点を、それらが「二つの秩序の間の対応」と自称し、それによって「初めの侵略によってこれらの対応をつくり出した操作」を隠していることにあとで考えている⁴⁵。経験とその表現との間の差異は、むしろ表現という出来事そのものの機能なのであり、その中で内部化と外部化の対応する過程が生じてくるのである。「内部」は「外部」との密接なつながりにおいて出現し、それは等しく表現という出来事の結果なのである。内部と外部との間の二次的な分離がいかにし引き起こされるかを説明することにより、メルロ＝ポンティは自己差異化の要素をそれ自身に含む根源的な統一へと注意を促している。

メルロ＝ポンティは表現という出来事に先行するような意味はないと主張している一方で、フェイルが、彼が表現する意図や意志の現存も強調していることを指摘しておくのは重要だ。私たちは自分のことを、何か言うことをもち、意図や思想や感情を程度の差はあれうまく表現する者として経験している。表現しようとする意志はすでに何度も繰り返されている表現によって伝えられ制限されるが、そうした表現が多かれ少なかれ私の意図をはしょったり変えてしまったりする。私は何かを厳密に何かとして意志することなしに、それを意志することはできない。意味の必然的な現存があり、それが表現のあらゆる瞬間において新たに生じている。この意味は表現する自己としての私に起因し、私が埋め込まれている世界によって求められているが、それは同時に世界に起因し、私によって求められているのである。表現の意味は単に私が意図した意味であるだけでなく、何らか特別な場合での特別な使用であるだけでなく、あらゆる場合において意味の使用を統制している規則や慣習によって理解されなければならない。私が何かを表現しようとするときの意図は、ヴァルデンフェルスにしたがって言えば、「水中の棒のように折れた、異質な媒介の中に浸さ

れた、『こわれた』意図」である⁴⁶。私の意図は「言葉が言わんとすること」に依存している⁴⁷。メルロ＝ポンティが非常に力強く述べているのは、端的に世界の内に存在することによって「私たちは意味に運命づけられていて、それが歴史の中で名を得ることなしには私たちは何もすることも言うこともできない」⁴⁸ということだ。私たちがどんなことであれしたり言ったりすることができるのは、実際、意味に運命づけられていることによってなのである。私は、私がそのうちに住み、私が誰であるかをいくぶんか輪郭づけているような意味を、意図的であれ非意図的であれ取り上げることによって私自身を表現し、それを表現することを通して私はこれらの意味を自分のものにする。私は端的に世界の内に存在することで意味を繰り返すが、この繰り返しはそれぞれの瞬間において一つの創造でもあり、これによって定着した意味が改変され定着し直されるのである。メルロ＝ポンティはすべてを包括する構造に主観性を従属させるのではなく、むしろ、自発性と創造性を保った表現の説明を提案している。表現という行為は表現の体系のうちに表現する身体を刻み込むが、他方で同時に、その体系に完全に閉じ込められることに抵抗するのである。

したがって、意味は何か表現される時の意図にも、すでに意味を担っている表現の定着した形式にも還元されない。むしろ、意味は表現されたものの全体であり、表現という出来事の中でそれが生じれば、それはそもそも新しく、そして同時にすでにそこにあるものとして生じている。表現する身振りの意味は発生における意味である、とメルロ＝ポンティは書いている⁴⁹。シルヴィア・ストローラーが指摘するように、表現という概念は彼の言い方の中では、「まさにその定義からして『表現』という行為における意味の実現なのである」⁵⁰。意味が生まれいずる状態にあるとは、すなわち、それが安定した価値ではなく、絶え間なく構成され、「生産されると同時に存在へと至るような」何かだということである⁵¹。間身体的に継続して構成されるものとしての表現する身体は、絶え間なく新たに生じる、生まれいずる状態の意味なのである。

状況づけられた表現

このように意味が生まれいずる状態にある基礎づける出来事として表現を理

解することに照らし合わせながら、グラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの間の相互作用の映像シーンを振り返ることにしよう。思い出してみると、そしてツァイラーの読みにしたがつと、そのシーンは女性たちの間の共同音楽活動がいかにして間身体的能力を引き起こしたかを示しており、その能力は、相互作用の外側では自分であることができるというサインをまったく見せない仕方で、グラディス・ウィルソンが自分を表現することができるようにしているように思われる。ウィルソン夫人の認知の衰えという状態と彼女が事実上話すことができないという記述があると、ウィルソン夫人ただ一人がフェイルによって表現するのを助けられていると、二人の女性の間の相互作用を読み取ることはまったくたやすいことである。一方でこの側面は彼女らの出会いにおいて確かに重要であり、ある程度はその出会いが始められた意図ではあるが、私が強調したいのは、グラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの間の相互作用を前者の依存と後者の補助的役割にだけに還元しないことの重要性である。ウィルソン夫人の病いのために制限された状態を否定はしないが、フェイルとの出会いにおける彼女の表現は、私の主張からすると、彼女のうちにともともと眠っていたがフェイルとのコミュニケーションのなかで目覚めされられ取り出された何かという言い方で単純に理解されるべきではない。むしろ、表現へと至ったものは、彼女の生成するものとしての存在であり、彼女はフェイルや共有された状況との間身体的関係を通して彼女であるところの者に成ったのである。彼女のアイデンティティは絶え間ない誕生の状態すなわち生まれいづる状態のうちにあり、関係し状況づけられるものとして果てしなく獲得されていくが、固定された完成にもたらされることは決してない。私は、ウィルソン夫人がどのように自分を表現できるようにしているかについて、過去の経験や形成されたアイデンティティの重要性を決して否定するものではない。実際、フェイルがウィルソン夫人にとって馴染みのない音楽の形式に関与したとしたら、ウィルソン夫人の反応はたいへん異なったものになっていただろう。しかし、単純に以前形成された能力が目覚めたり、認知の衰えを生き残ったものが露呈してくるというより、二人の女性の間の相互作用には何か他のものが問題になっているのだ。表現にもたらされた能力は、ツァイラーが主張するように、間身体的な自己-他者-世界関係において存在するに至っている。このこ

とはウィルソン夫人にのみ当てはまることなのではなく、フェイルにも当てはまることで、フェイルもウィルソン夫人との関係や彼女と共有した状況において、またそれをとおして彼女であるところの者に成る、と私は主張したい。フェイルがウィルソン夫人とまったく異なる程度の自立をもっているかぎり、相互作用に対するフェイルの状態がウィルソン夫人のそれとは劇的に異なっているということはもちろん否定できないし、それを強調することは大切であるが、すべての自立はそれが形成される状況や状態への依存に根差しているということをここで心にとどめておくことが大切である。たとえ新たな仕方で依存的になることがしばしば自己と他者の双方によって自立の喪失として経験され理解されとしても、自立していることはその自立を可能にしている特別な状態に依存していることだ、ということはいくら強調しても足りない。これは、誰もが等しく他者に依存しているとしても、確かにまさに同じ仕方で等しく依存しているわけではない、ということを使うものではなく、むしろ、依存というのは異なる仕方、異なる状態、異なる状況と環境において記述されることになる、ということを使わんとするのである。これらの差異は、グラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの間の相互作用のケースが示しているように、明らかに重要な意義をもっている。ウィルソン夫人に近づいたのはフェイルであり、他の仕方ではなかったし、単にウィルソン夫人に関与しようという彼女の意図だけのゆえにではなく、もっと重要なことには、ウィルソン夫人が自立して動き回り、フェイルと同じ仕方で世界や他者に近づく能力を欠いていたがゆえ、であった。同様にウィルソン夫人はフェイルとの相互作用から逃げる可能性をほとんどもっておらず、彼女は確かに相互作用を拒んで静かに反応しないままでいることもできたが、彼女は歩いて去っていく可能性はもっていなかった。

映像シーンについてももう一つ注目されるべきは、ウィルソン夫人がただフェイルに応えるように一緒に歌い始めるのだが、彼女が他者の明白な助けなしには自分のことを表現することができないということは、実際はまったく明らかなでないということだ。実際、ウィルソン夫人が肘掛け椅子に自分で座っているところを示す映像シーンの最初の場面は、私の主張では、彼女を表現しないものとして示してはいない。彼女は誰かが近づく前から手や足をリズムカルに動かしている様子が見られているし、彼女は彼女の特別な状態が与えられると特

別な状況に関わり始める。映像シーンは彼女が周囲から離れて内面に向かっていように見せているが、彼女は表現しない存在ではなく、はつきりと内面に向かっていことを表現しているのである。彼女が内面に向かっていことは彼女の状況に応じていことであり、彼女が自分の特別で個人的なアイデンティティを表現するものとして出現するのは、周囲の状態に状況づけられ、それらと関係することにおいてなのである。彼女と一緒にいる誰かに応じて目に見えて自分を表現することではなく、周囲の者から切り離されているように見えるが、このことは彼女が他者の助けなしに自分を表現できないということではない。彼女の表現は最低限のものとして理解されるかもしれないが、誰かが共同活動において彼女に関与する前であっても、それらの表現はそこにあるのだ。私たちがこれまでに述べてきたことから、次のようなことが明らかになったはずである。つまり、これは、十分に形成された個々のアイデンティティというものがあり、それが周囲のものから独立して自分を表現し、そして第二のステップで初めて他者と相互作用するということを使うものではなく、むしろ、私たちの間身体的な関係は具体的な他者との身体的に間主観的な出会いよりもはるかに徹底していること、そして、表現は外へ出すことや公けにすることといった単純な言い方では理解されえないということを強調することなのである。

誰か具体的な他者との相互作用がなくても、まったく自分で座って見た目上は周りの世界から孤立しながらも、グラディス・ウィルソンは世界と彼女の状況との間身体的な交換において彼女がそうである者に成っている。しかしながら、もし彼女が他の具体的な他者との出会いや相互作用を奪われれば、世界のうちでの彼女の間身体的な生成や表現の可能性はますます小さくなるだろう。生きられた身体は、どのように状況づけられているかは別にして、それらがその一部となっている世界へと拮抗しており、周りのものやお互いへと意図的に向けられている。生きられた身体は直接に意味を表現し、それらの表現は全体としての状況に、この状況の常に変化する地平も含めて、応答している。私の行為が他者によって取り上げられ理解されるのも、同じように私が他者の行為を取り上げ理解できるのも、私の表現する受肉と世界との関係をとおしてなのである。私が意味の溢れたものとして直接に認識する世界の内の他者の表現をとおして、私はその人を私自身の自己から区別されるもう一人の自己として

同定する。その主観性が現前するものとされ、メルロ＝ポンティが言うように、「私自身の志向の奇跡的な延長、世界を扱う慣れ親しんだ方法」を私が発見するのは、他者の表現と他者が世界を扱う仕方においてなのである⁵²。その振る舞いをとおして、他者は、私の振る舞いのうちに受肉した私の運動志向に自分を差し出してくる。志向の延長と世界を扱う慣れ親しんだ方法というこの認識は、映像シーンに見られるグラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの出会いにおいて取り出されていた。フェイルが相互作用においてウィルソン夫人に関与するとき、彼女はウィルソン夫人のすでに表現している生きられた身体に関与しているのであり、腕と脚の最小限の動きやキリスト教信仰と教会との関わり合いに照らされて、ウィルソン夫人が世界を扱う仕方に出会っているのである。フェイルが歌い始めたとき、今度はウィルソン夫人の方で、彼女自身の意図がそれに応じている世界の慣れ親しんだ扱い方をフェイルの行為のうちに認識する。メルロ＝ポンティの言葉で言うと、彼女は彼女のうちに生きている他者を経験するように、「他者の表面的な表現のうちで生きる」ようになる⁵³。

自分自身の志向のこのような「奇跡的な延長」と自己が他者のうちに認識する「世界を扱う慣れ親しんだ仕方」⁵⁴は、自己がもつ他性（alterity）や困惑、それが呼び起こした不思議や驚きという背景に対してのみ際立ってくるのだ。すると今度は、自己がもつ他性が、親しいものの織物のうちで掴まれることから逃げるようにして、おそらく予期されてはいない新たなものだがまだ認識可能なパターンにおいてそれを編むという一つのスタイルとして現前してくる。世界へと延び広がっていくこと、そして、他の人々に意図的に向けられていることは、方向づけを失い困惑することに対して開かれているということであり、自分が「他者によって取り壊され再び築かれ」、今度はその他者が私によって取り壊され再び築かれるようになるがままにすることである⁵⁵。他者が自分の方に私を引っ張り、こうして私は自分の外へと引っ張り出されては再び戻っていく。同じようにして、私は他者をその自己から外へ私に向けて引っ張り出すわけだ。

したがって、他の人をまさに他者として、つまり、私自身ではない他のもう一つの自己として、そして単純に自分自身の延長や拡大としてではなく認識するということは、相互作用を通して自分自身にとっての他者となることに開か

れているということを含んでいる。非対称な依存関係を含むか、他者が根本的に他なるものとして現れるために、世界に関与する慣れ親しんだ仕方が見つかりにくい場合、他者になることや、他者との出会いの中で自分から引き出され変形させられることへとこのように開かれていることの重要性は誇張しにくくなる。アルツハイマー病からくる認知と身体の衰えに苦しみ、基本的な日常の必要に対する他者からのケアを求めているため、グラディス・ウィルソンは事実上話すことができないと記述されており、世界に対する表現する関係において主観になることが何を意味するのかについての伝統的な理解に彼女は当てはまらない。主観性の感覚を欠いた存在として、その状態ゆえに「自己にふさわしくない」⁵⁶としてウィルソン夫人を片付けてしまうことは簡単だろう。しかしながら、私たちが見てきたように、映像シーンは彼女をナオミ・フェイルと出会う前でも後でも主観性を表現するものとして示している。さらに重要なことに、そのシーンは、フェイルが、相互作用において自分から引き出されてあることに開かれていることや、ウィルソン夫人の動きと世界の内に存在する仕方、リズムへの反応の仕方やリードの取り方を通して、ウィルソン夫人が彼女を取り壊し新しいリズムの中で再び築くのに任せていることを示している。彼女たちの関係の非対称にもかかわらず、そのシーンはフェイルがウィルソン夫人の表現を可能にしていることを示すだけでなく、二人の女性の間の境界線が引き直されるような共同活動へのウィルソン夫人の関与のうちにある力へと注意を促してもいる、と私は主張したい。ウィルソン夫人が自分を見出している状況に応じることで、彼女の表現は彼女の存在の間身体的なつながりを反映しているだけでなく、異なる仕方でそれを触発するようになるのである⁵⁷。

結語

上述において、グラディス・ウィルソンとナオミ・フェイルの間にあったような受肉した主観同士の特別な出会いと相互作用が、どのように主観観を構成する基礎的で間身体的なつながりに基づいているのかということに注意を向けてきた。ウィルソン夫人の認知の衰えという特別な状態と、同じくそれをもって始められたフェイルの治療的な意図とによって統制された、ウィルソン夫人

とフェイルの間の相互作用は、基礎的な結びつきを見えるようにする一筋の光を提供してくれる。ウィルソン夫人とフェイルの間の相互作用が間身体的な能力を引き起こすということについて私はツァイラーに賛成するものであるが、これに加えて、この相互作用が実はすべての相互作用において起きていることを反映しているということ、受肉した主観性が世界と他者とのダイナミックで間身体的な交換において出現するかぎり、すべての能力は基本的に間身体的であるということを私は主張する。私が理解してもらいたい点は、ウィルソン夫人とフェイルの間の相互作用において起きていることが、重要な点ではすべての相互作用において起きていることと何も変わらないということ、そして、この相互作用を例外的なものにしていることの大部分は、それが、ふつうの日常的な相互作用ではしばしば主観性の自立や原子論的な捉え方によって見えなくなっている、構成的な関係性や間身体的な結びつきをわれわれに見えるようにしてくれるということである。世界の内で主観であるとは何を意味するかについての伝統的な捉え方にはいろいろな仕方で当てはまらないケースや、それと違ってたとえばアルツハイマー病のように依存、無能力、傷つきやすさという用語で特徴づけられるようなケースは、私の考え方では、伝統的な捉え方に批判的な取り調べをするよう促しているはずで、ふつうで平凡と見なされていることに重要な洞察を提供することができるのである。グラディス・ウィルソンの主観性がもつ関係性や間身体的なつながりを際立たせることは、異常な逸脱を指摘することではなく、主観性そのものにとって本質的な側面へ注意を喚起することなのである。身体同士の関係性、相互接続、相互依存を主観性やアイデンティティにとっての脅威として考えるのではなく、むしろガイル・ヴァイスが述べるように、「まさにアイデンティティの概念を、それが他者との関係にもかかわらずではなく、他者との関係において、それをとおしてのみ、意味を持っているということを見るために、考え直す」⁵⁸必要があるのだ。

私がここで取り出した表現の関係として間身体性を理解することは、認知症の状態に苦しむ人のうちには自己性が残っているという考えを概念化するためにも重要である。認知の衰えにも関わらず生き残っていて表現に至るようになる自己の残余について語ることは、自己や主観性を固定したものとして、すでに形成されたものとして理解し、それが保存され、状態の発展によってかつて

あったがままに眠っているのだが、それが公にするという言い方で考えられた表現にもたらされるよう手助けされるような、そういうものとして理解することを前提してしまい、また再生産してしまうという危険にさらされている。むしろ、私が強調してきたのは、受肉した主観性の間身体的な理解が、すでに形成された身体的主観からそれらの間の構成的関係へ焦点を移してくれるということであり、また、異なる仕方やお互いへの異なる関係のうちで受肉した主観性を形成するために、身体的な境界が引かれまた引き直され、定着させられては改変させられていくのを強調してくれるということである。さらに、私は表現という用語によって自己性の間身体的生成をメルロ＝ポンティが概念化することにも焦点を当ててきた。そこでは表現がすでに形成された内部を押し出したり公けにしたりすることとして理解されるのではなく、何かが何かとして出現し、意味が絶えざる誕生の状態、生まれいずる状態にあるような内部化と外部化の運動として理解された。そのような概念化は、決して完成することはないが、認知症に含まれる認知の衰えをとおしてもなお絶えざる生成のうちにあのような、絶え間ない達成として主観性を認識することになる。方向づけを失い、当然とみなされる能力も親しさも認識も失っていると特徴づけられる認知症の状態において自己を維持しているものについて語ることは、明らかに、時間の経過をとおして沈殿し定着してきた身体的な規範、価値、個人的好み、性格、思想、世界の内に存在する仕方、世界を扱う仕方から成る認識可能なアイデンティティを含んでいるにちがいない。しかしながら、同様に強調することが大切なのは、この認識できるアイデンティティが、定着しているだけでなく、生きられた経験の中で分節化され、時間の経過をとおして繰り返されながら絶えず改変されてもいるということだ。認知症の状態という認知の衰えを通じて自己が生き残ることは、かつて満開だったものが今は眠っているというような定着したアイデンティティとしてではなく、まさにその存在がその人の状況全体に应じるなかで、絶え間なく生成しているような自己の表現に対する能力である、と私は主張したい。認知症という状態は、ある人がそうであった存在ではもはやないという深刻な喪失や苦悩の事態でもあれば、また、そうした喪失をとおして生き続け、再方向づけと再建（rehabilitation）の仕方を見つけながら、その人であることを維持するという事態でもある。認知症の人を間身体的

で生まれいずる状態にあるものとして理解することは、残っていること、すなわち沈殿している身体的規範や世界の内で存在する仕方に光を投げかけるとともに、かつてそうであったのとは根本的に異なる仕方であるような人に絶え間なく成っていくという、方向づけを失ったり再び方向づけたりすることにも光を投げかけてくれるのである。

謝辞

リンショーピン大学主題研究「技術および社会変化」学部における P6 セミナーの参加者と二名の匿名の評者に、本稿の初期草稿への彼らの有益なコメントに感謝したい。本稿は、国立銀行記念基金の助成を受けた、リンショーピン大学 CEDER 研究プログラムのうちの私の研究の一部である。

文献

- Ahmed, S. *The Cultural Politics of Emotion*. London and New York: Routledge, 2004.
- Cahill, A. *Overcoming Objectification: A Carnal Ethics*. London and New York: Routledge, 2011.
- Cohen, D., and C. Eisdorfer, *The Loss of Self: A Family Resource for the Care of Alzheimer's Disease and Related Disorders*. New York: New American Library, 1986.
- Fontana, A., and R. Smith. "The 'Unbecoming' of Self and the Normalization of Competence." *Sociological Perspectives* 32(1) 1989: 35–46.
- Fóti, V. *Tracing Expression in Merleau-Ponty: Aesthetics, Philosophy of Biology, and Ontology*. Evanston, IL: Northwestern University Press, 2013.
- Hedman, R. *Striving to Be Able and Included: Expressions of Sense of Self in People with Alzheimer's Disease*. Stockholm: Karolinska Institutet, 2014.
- Hughes, J., S. Louw, and S. Sabat. "Seeing Whole." In J. Hughes, S. Louw, and S. Sabat (eds.), *Dementia: Mind, Meaning and the Person*, pp. 1–40. Oxford and New York: Oxford University Press, 2006.
- Hughes, J. *Thinking through Dementia*. Oxford and New York: Oxford University Press, 2011.
- Hydén, L-C, H. Lindemann, and J. Brockmeier. *Beyond Loss: Dementia, Identity, Personhood*. Oxford and New York: Oxford University Press, 2014.
- Kitwood, T. *Dementia Reconsidered: The Person Comes First*. New York: Open University Press, 1997.
- Kitwood, T. *Tom Kitwood on Dementia: A Reader and Critical Commentary*. Edited by C. Baldwin and A. Capstick. New York: Open University Press, 2007.
- Kontos, P. "Ethnographic Reflections on Selfhood, Embodiment and Alzheimer's Disease," *Ageing and Society* 24 (2004): 829–849.
- Kontos, P. "Embodied Selfhood in Alzheimer's Disease: Rethinking Person-centred Care," *Dementia* 4(4) 2005: 553–570.
- Kontos, P. "Musical Embodiment, Selfhood, and Dementia." In L-C. Hydén, H. Lindemann, and J. Brockmeier (eds.), *Beyond Loss: Dementia, Identity, Personhood*, pp. 107–119. Oxford and New York: Oxford University Press, 2014.

- Kwant, R. *Phenomenology of Expression*. Pittsburgh, PA: Duquesne University Press, 1969.
- Käll, L.F. “A Being of Two Leaves—On the Founding Significance of the Lived Body.” In J. Bromseth, L.F. Käll, and K. Mattsson (eds.), *Body Claims*, pp. 110–133. Uppsala University Series in Gender Research: Crossroads of Knowledge, 2009.
- Käll, L.F. “Intercorporeality and the Constitution of Body Schemata: A Case of Pain.” In R. Fox and Nicole Monteiro (eds.), *Perceiving Pain: Global and Cross-Cultural Understandings*, pp. 51–62. Witney, Oxfordshire: Interdisciplinary Press, 2014.
- Käll, L. *Expressive Selfhood* (Unpublished dissertation). Center for Subjectivity Research, University of Copenhagen, Copenhagen, Denmark, 2007.
- Landes, D. *Merleau-Ponty and the Paradoxes of Expression*, London and New York: Bloomsbury, 2013.
- Marratto, S. *The Intercorporeal Self: Merleau-Ponty on Subjectivity*, Albany, NY: SUNY Press, 2012.
- McLean, A. *The Person in Dementia: A Study of Nursing Home Care in the US*. New York: Broadview Press, 2007.
- Merleau-Ponty, M. *Phenomenology of Perception*. London & New York: Routledge, 1962.
- Merleau-Ponty, M. *Signs*. Evanston, IL: Northwestern University Press, 1964.
- Merleau-Ponty, M. “An Unpublished Text by Maurice Merleau-Ponty: A Prospectus of His Work.” In M. Merleau-Ponty, *The Primacy of Perception*. Edited by J.M. Edie, pp. 3–11. Evanston, IL: Northwestern University Press, 1964.
- Merleau-Ponty, M. *The Visible and the Invisible. Followed by Working Notes*, Evanston, IL: Northwestern University Press, 1968.
- Merleau-Ponty, M. *The Prose of the World*. Evanston, IL: Northwestern University Press, 1973.
- Merleau-Ponty, M. *Child Psychology and Pedagogy: The Sorbonne Lectures 1949–1952*. Evanston, IL: Northwestern University Press, 2010.
- Sabat, S. “Surviving Manifestations of Selfhood in Alzheimer’s Disease: A Case Study.” *Dementia* 1(1), 2001: 25–36.
- Sabat, S. *The Experience of Alzheimer’s Disease. Life rough a Tangled Veil*. Oxford & Malden: Blackwell, 2001.
- Sabat, S., and R. Harré. “The Construction and Deconstruction of Self in Alzheimer’s Disease,” *Ageing and Society* 12 (1992): 443–461.
- Stoller, S. “Expressivity and Performativity: Merleau-Ponty and Butler,” *Continental Philosophy Review* 43 (2010): 97–110.
- Waldenfels, B. “The Paradox of Expression.” In F. Evans and L. Lawlor, *Chiasms: Merleau-Ponty’s Notion of Flesh*, pp. 89–102. Albany, NY: SUNY Press, 2000.
- Weiss, G. “Intertwined Identities: Challenges to Bodily Autonomy,” *Perspectives: International Postgraduate Journal of Philosophy* 2 (2009): 22–37.
- Zeiler, K. “A Philosophical Defense of the Idea that We Can Hold Each Other in Personhood: Intercorporeal Personhood in Dementia Care,” *Medicine, Health Care and Philosophy* 17 (2014): 131–141.
- Örülkv, L. *Fragile Identities, Patched-up Worlds: Dementia and Meaning-Making in Social Interaction*. Linköping: Linköping University, 2008.

注

1. J. Hughes, S. Louw, and S. Sabat, “Seeing Whole,” in *Dementia: Mind, Meaning and the Person*, J. Hughes, S. Louw, and S. Sabat (eds.), 1–40 (Oxford and New York: Oxford University Press, 2006), 5.
2. そのような見方は、次でよく知られるようになった。D. Cohen and C. Eisdorfer, *The Loss of Self: A Family Resource for the Care of Alzheimer’s Disease and Related Disorders* (New York: New American Library, 1986) 概観としては、次を参照。A. McLean, *The Person in Dementia: A Study*

- of Nursing Home Care in the US (New York: Broadview Press, 2007)
3. 認知症の人格性や主観性についてのトム・キットウッドの著作はこの焦点の移動や研究分野を打ち立てた草分けであり、依然として非常に重要である。次を参照。T. Kitwood, *Dementia Reconsidered: The Person Comes First* (New York: Open University Press, 1997); T. Kitwood, *Tom Kitwood on Dementia: A Reader and Critical Commentary*, C. Baldwin and A. Capstick (eds.) (New York: Open University Press, 2007) 同様にたとえば以下の文献も参照。R. Hedman, *Striving to Be Able and Included: Expressions of Sense of Self in People with Alzheimer's Disease* (Stockholm: Karolinska Institutet, 2014), J. Hughes, S. Louw and S. Sabat, "Seeing Whole," J. Hughes, *Thinking Through Dementia* (Oxford and New York: Oxford University Press, 2011). L-CHydén, H. Lindemann, and J. Brockmeier, *Beyond Loss: Dementia, Identity, Personhood* (Oxford and New York: Oxford University Press, 2014), P. Kontos, "Ethnographic Reflections on Selfhood, Embodiment and Alzheimer's Disease," *Ageing and Society* 24 (2004): 829-849, P. Kontos, "Embodied Selfhood in Alzheimer's Disease: Rethinking Person-centred Care," *Dementia* 4 (2005):553-570, S. Sabat, "Surviving Manifestations of Selfhood in Alzheimer's Disease: A Case Study," *Dementia* 1 (2001): 25-36, S. Sabat, *The Experience of Alzheimer's Disease. Life Through a Tangled Veil* (Oxford & Malden: Blackwell, 2001), S. Sabat and R. Harré, "The Construction and Deconstruction of Self in Alzheimer's Disease," *Ageing and Society* 12 (1992): 443-461, L. Örv, *Fragile Identities, Patched-up Worlds: Dementia and Meaning-Making in Social Interaction* (Linköping: Linköping University, 2008).
 4. K. Zeiler, "A Philosophical Defense of the Idea that We Can Hold Each Other in Personhood: Intercorporeal Personhood in Dementia Care," *Medicine, Health Care and Philosophy* 17 (2014): 131-141.
 5. Zeiler, "A Philosophical Defense," 137.
 6. 映像シーン「グラディス・ウィルソンとナオミ・フェイル」はいわゆるバリデーション療法^(訳注v)の提示として制作された。この療法は認知症の診断を受けた高齢の人々とコミュニケーションをとるための方法としてナオミ・フェイルによって開発された。その映像シーンのなかで、二人の女性の相互作用を見せている部分は、ナオミ・フェイルが療法を記述し、グラディス・ウィルソンとの相互作用で進行していることについての彼女の解釈を与える部分とからみ合っている。私のここでの関心は相互作用の部分に限定されている。相互作用についてのフェイルの解釈やウィルソン夫人の経験について述べるべきことは多くあるが、それは本稿で私がしたいことではない。この映像は、アルツハイマー病と文化的記憶のための基金、メモリー・ブリッジ制作のドキュメンタリー映画「橋がある (There is a Bridge)」からのものである。それは次のサイトで利用できる。
<http://www.memorybridge.org/videos.php> および
<https://www.youtube.com/watch?v=CrZXz10FcVM>
 バリデーション療法については、次を参照。 <https://vfvalidation.org>
 7. 深刻な認知の衰えにもかかわらず音楽性や音楽的能力が持続して現れることは認知症の進んだ段階であっても報告されており、認知症ケアにおける音楽療法は認知症の人々に関与し活性化するなかで有効であることを示してきた。例えば、次を参照。P. Kontos, "Musical Embodiment, Selfhood, and Dementia," in *Beyond Loss: Dementia, Identity, Personhood*, L-C. Hydén, H. Lindemann, and J. Brockmeier (eds.) 107-119 (Oxford and New York: Oxford University Press, 2014)
 8. Zeiler, "A Philosophical Defense," 136.
 9. Zeiler, "A Philosophical Defense," 138.
 10. Zeiler, "A Philosophical Defense," 139.
 11. ツァイラーの記述した面と向かい合う相互身体性は、それが意識する(そして自己意識する)主観同士の間との相関関係であるかぎり、おそらく身体的間主観性という言い方でも理解されるかもしれない。間身体性という概念と間主観性という概念との間の区別を強調しつつ、スコット・マラットは以下のように書いている。「意識する主観同士の間には何らかの関係がありうるより前に、私の身体は他者の身体とすでに結びつけられている。しかし、身体同士のこの相互的な含みあいは、意識する主観同士の間との差異を克服はしない。それが端的に主張しているのは、この差異が見守られなければならないということである。それは責任と決断の問題であり、決断とは意識した決断として始まるものではなく、意識によって

- 引き受けられねばならないのである」。S. Marratto, *The Intercorporeal Self: Merleau-Ponty on Subjectivity* (Albany, NY: SUNY Press, 2012), 144.
12. A. Cahill, *Overcoming Objectification: A Carnal Ethics* (London and New York: Routledge, 2011), 148.
 13. M. Merleau-Ponty, *Signs* (Evanston, IL: Northwestern University Press, 1964), M. Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible. Followed by Working Notes*. (Evanston, IL: Northwestern University Press, 1968)を参照。メルロ＝ポンティが *intercorporeité* という特別な用語を使うのは後期の著作だけだが、この用語が捉えている身体同士の間の構成的相互接続は彼の著作に一貫して見られる。『知覚の現象学』で、「私の身体と他者の身体は一つの全体であり、ひとつの同じ現象の二つの面であり、私の身体がその絶えず更新される痕跡であるような匿名の実存が、これからは両方の身体に同時に住まうことになる」と彼は書いている。M. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception* (London & New York, 1962), 354. 同様に 1950 年から 51 年の「幼児の対人関係」についての講義で、彼は癒合的社会性と他動性という言い方で身体同士の間の構成的な相互接続を論じている。M. Merleau-Ponty, *Child Psychology and Pedagogy: The Sorbonne Lectures 1949–1952* (Evanston, IL: Northwestern University Press, 2010).
 14. Cahill, *Overcoming Objectification*, 148.
 15. Marratto, *The Intercorporeal Self*, 146.
 16. Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, 137. 私は生きられた身体とその二重感覚という自己触発的な構造を以下の論文で議論した。“A Being of Two Leaves—On the Founding Significance of the Lived Body,” in *Body Claims*, J. Bromseth, L.F. Käll and K. Mattsson (eds.), 110–133. Uppsala University Series in Gender Research: Crossroads of Knowledge, 2009.
 17. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 93.
 18. Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, 123. Cf 147f, 254; *Phenomenology of Perception*, 93.
 19. Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, 9, 147, 260f.
 20. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 408. Cf Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, 254.
 21. Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, 249 (italics in original).
 22. Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, 148; *Phenomenology of Perception*, 373.
 23. 一方が他方へと入り込んでいくような、触れることと触れられることの間のつながりは、触れられないものにおいて生じる、とメルロ＝ポンティは書いている。この触れられないものは触れられるものの別の次元であり、単純に手が届かなくてまだ触れられていないような触れられるものとしては理解されえない。それはむしろ、触れられるものがそもそも触れられるものであるために、触れられないままでなければならないような、触れられないものとみなされなければならない。それは、他者の触れられないものであると等しく私自身のふれられないものであり、私が決して触れることも、見ることも、知ることもないものである。しかし、触れられないものは触れられるものにとって外的ではなく、むしろ、触れられるものの只中に見出され、それと共にあふれ出すのである。触れられないもの（見えないもの、知覚できないもの）は、私の知覚がそこから生じるようなパースペクティブを基づけている、私に必要な盲点なのである。それは、感じかつ感じられるものとして私自身を私が経験するための出発点であり、同様にこの経験がそこで終わる終着点でもある。次を参照。Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, 151, 249, 254, 272.
 24. Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, 245. Cf M. Merleau-Ponty, *The Prose of the World* (Evanston, IL: Northwestern University Press, 1973), 134f.
 25. Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, 137, 245.
 26. 他者性という言葉で狭く取られ過ぎる危険を冒しているなら、私自身の自己は私にとって他者とは異なる存在として露わになるが、さらに他者が自己にとっての他なるものであるように、他者にとって他なるものとしても露わになる。したがって、私は私自身にとって他なるものとしても露わになる。このように、私は他者にとっての他なるものになると同時に、他者が私自身のようなもう一つの自己であって私自身ではない限り、私自身にとって他なるものになる。私の他者への開放性は、他なるものとしての私自身や、あるいは私の存在の本質的部分としてすでに私の中にある他者性に対する開放性を表現している。Merleau-Ponty, *The Prose of the World*, 85f, 134f; *The Visible and the Invisible*, 139, 224; *Child Psychology and Pedagogy*, 120.
 27. Merleau-Ponty, *The Prose of the World*, 78. そこでは私が世界の中へあふれ出ていき世界にな

- るような、世界についての前意識的な所有という状態において、世界への私の根源的關係は、そこにおいて身体—私の身体も他者の身体も—と世界が同じ肉から出現し作られているような、絡まり合いの一つであるとして露わになる。メルロ=ポンティにおける肉という考え方は豊富な意味をもち、その十分な議論は本稿の射程を超えている。Merleau-Ponty, *The Visible and the Invisible*, p 248.
28. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 98, 99.
 29. M. Merleau-Ponty, “An Unpublished Text by Maurice Merleau-Ponty: A Prospectus of His Work,” in *The Primacy of Perception*, J. Edie (ed.), 3–11 (Evanston, IL: Northwestern University Press, 1964), 5.
 30. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 101, 141.
 31. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 106.
 32. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 100.
 33. 私は湿った砂浜を歩いていて突然鋭いものに出会うというこの例を、以下の拙論でも用いた。“Intercorporeality and the Constitution of Body Schemata: A Case of Pain,” in *Perceiving Pain: Global and Cross-Cultural Understandings*, R. Fox and N. Monteiro (eds), 51–62 (Witney, Oxfordshire: Interdisciplinary Press, 2014).
 34. S. Ahmed, *The Cultural Politics of Emotion* (London and New York: Routledge), 24.
 35. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, xi; *The Visible and the Invisible*, 136; *The Prose of the World*, 78.
 36. Merleau-Ponty, “An Unpublished Text,” 6.
 37. Merleau-Ponty, *Signs*, 168, 174.
 38. Marratto, *The Intercorporeal Self*, 181.
 39. B. Waldenfels, “The Paradox of Expression,” in *Chiasms: Merleau-Ponty’s Notion of Flesh*, F. Evans and L. Lawlor (eds.), 89–102 (Albany, NY: SUNY Press, 2000), 93.
 40. V. Fóti, *Tracing Expression in Merleau-Ponty: Aesthetics, Philosophy of Biology, and Ontology* (Evanston, IL: Northwestern University Press, 2013), R. Kwant, *Phenomenology of Expression* (Pittsburgh: Duquesne University Press, 1969), L. Käll, *Expressive Selfhood* (Unpublished dissertation) (Center for Subjectivity Research, University of Copenhagen: Copenhagen, Denmark, 2007), D. Landes, *Merleau-Ponty and the Paradoxes of Expression* (London and New York: Bloomsbury, 2013), Waldenfels, “The Paradox of Expression.”
 41. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 391.
 42. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 161.
 43. Merleau-Ponty, *Child Psychology and Pedagogy*, 449.
 44. このように、メルロ=ポンティの説明における表現という考え方は、内部の心と外部の身体との間の伝統的な袋小路の外から出る道を提供してくれる。この道は、一方を他方に折りたたんでしまうことなく、また、一人称のパースペクティヴから主観的に経験されるものと三人称のパースペクティヴから間主観的に近づくことの出来るものとの間の緊張を捨てることもしに、そうするのである。そして実際、メルロ=ポンティが表現、それもとくに語りの領野に向かう理由は、第一に「これを最後に伝統的な主観-客観の二分法」を置いていくことができるようにするためである。次を参照。Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 174.
 45. Merleau-Ponty, *Signs*, 18.
 46. Waldenfels, “The Paradox of Expression,” 98.
 47. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, xv.
 48. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, xiv.
 49. Merleau-Ponty, *The Prose of the World*, 82.
 50. S. Stoller “Expressivity and Performativity: Merleau-Ponty and Butler,” *Continental Philosophy Review* 43 (2010): 97–110, 98.
 51. Stoller, “Expressivity and Performativity,” 109; see also Waldenfels, “The Paradox of Expression,” 92f.
 52. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 354.
 53. Merleau-Ponty, *Signs*, 146.
 54. Merleau-Ponty, *Phenomenology of Perception*, 354.
 55. Merleau-Ponty, *The Prose of the World*, 20.
 56. A. Fontana and R. Smith, “The ‘Unbecoming’ of Self and the Normalization of Competence,” *Sociological Perspectives* 32 (1989): 35–46.

57. G. Weiss, "Intertwined Identities: Challenges to Bodily Autonomy," *Perspectives: International Postgraduate Journal of Philosophy* 2 (2009): 22–37.
58. Weiss, "Intertwined Identities," 35.

訳注

- i メルロ＝ポンティが好んで使うラテン語表記そのまま使われている。
- ii ここでは *ability* ではなく *capability* が使われている。この語は、アマルティア・センやマーサ・ヌスバウムらによって使われ、当初「潜在能力」と訳されていたが、誤解が生じやすいので、「潜在可能性」「選択肢の幅」「生き方の幅」とも訳されたりしたが、近年は「ケイパビリティ」とカタカナ表記にする例も多い。ここでは必ずしもそういう文脈を考慮しているわけではないと思われる。また、フッサールの *Vermöglichkeit* という語との連関（それについては、本誌掲載の浜渦原稿“On Dis/Ability in Husserl’s Phenomenology”参照。浜渦は、それを絵英語では *capability* で訳し、日本語では「可能性」という訳語を当てている）も考えられるが、ここでは、単純に「能力」とのみ訳しておく。
- iii これは、フッサールが他者論において使った用語である。他者の志向性を遮断するという独特の主題的エポケーによって得られる自我に固有な領域をこの語で呼んだ。しかし、ここでは必ずしもフッサールの用法に忠実に従っているわけではない。
- iv *subject* という語は、認識論・理論哲学の場面では「主観」と訳し、行為論・実践哲学の場面では「主体」と訳すという訳し分けが行われることがあり、それに従うと、ここも含め多くの場面で「主体」と訳した方がいいかも知れない。しかし、シェルの前稿も含め、*subjectivity* をずっと「主観性」と訳してきたこともあり、それとの繋がりを失いたくないので、本稿では一貫して「主観」と訳した。
- v 「バリデーション療法」については、本稿の解題を参照されたい。

（訳：青木健太・浜渦辰二）

解題

本稿は、リサ・フォークマーソン・シェル准教授の論考 “Intercorporeal Expression and the Subjectivity of Dementia”（in: *Body/Self/Other: Phenomenology of Social Encounters*, edited by Luna Dolezal and Danielle Petherbridge, SUNY, in printing）を訳したもので、和訳が本誌に掲載されることについては、シェル氏から快諾を頂いている。シェル氏については、すでに、高山佳子・浜渦辰二訳「位置づけられた身体をもつことと家（ホーム）がもつ意味—フェミニスト現象学の視点から」（『臨床哲学』第 15-2 号、pp.74-100, 2014）、青木健太・浜渦辰二訳「単なる喪失ではない：加齢に伴う認知症における自己のあり方」（『臨床哲学』第 16 号、pp.82-109, 2015）と、二本の論考の和訳が本誌に掲載されており、前者論文には稲原美苗氏による解題、後者論文には浜渦による解題が付されているので、そちらを参照していただきたい。

当時は、スウェーデン・リンショープン大学の所属であったが、現在は、ストックホルム大学（民族学、宗教史、ジェンダースタデーズ学部）に所属している。ここでは、本稿が本誌に掲載されるに至った経緯を述べておきたい。

上記解題に記されているように、シェル氏には、2014年2月28日と3月1日に上記の二つの発表をいただいたが、その翌年2015年3月には、フィンランド・ユヴェスキュラ大学（ヘルシンキ大学兼任）のサラ・ヘイナマー教授をお招きし、“Transformations of Old Age: Selfhood, Normativity, and Time”を講演頂き、その原稿の和訳「老いの変容：自己性、標準性、時間」が本誌に掲載された（高原耕平・浜渦辰二訳、『臨床哲学』第17号、pp.77-100）。その解題に記したように、その後、同年9月にはこちらから稲原美苗氏・川崎唯史氏とともにヘルシンキ大学を訪ねて、「オープン・ダイアログ」の第一人者ヤーコ・セイックラ教授（ユヴェスキュラ大学）とともに行った“Dialogue and Intersubjectivity — An interdisciplinary workshop”において筆者自身は講演“Dialogue in Husserl's phenomenology and psychiatry”を行い、また、哲学研究室セミナーでは講演“Intersubjectivity of Ageing - Reading Beauvoir's *The Coming of Age*”をする機会を与えられた。さらに、2016年3月には、ヘルシンキ大学よりヘイナマー氏と若手研究者4人をお招きし、豊中キャンパスで Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium “Phenomenology of Vulnerability and Limits”を開催した。

これらの活動を踏まえ、シェル氏、ヘイナマー氏らを共同研究者として申請していた科学研究費補助金による共同研究「北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究」が採択され、2016年4月から新たな活動を開始した。国内での研究会を重ね、それを踏まえながら、北欧でも発表の機会をもつことになった。そこで、まず、ストックホルム大学で、シェル氏のオーガナイズにより、The Seminar in Feminist Continental Philosophy in Stockholm “Feminist Phenomenology: Perspectives from Japan”(Stockholm University, June 12, 2017)を行い、中澤瞳氏（日本大学）“Body schema and theory of feminist phenomenology”と中真生氏（神戸大学）“Some glimpses at Japanese feminist philosophy: In terms of reproduction and motherhood”の二人が発表を行なった。そこからノルウェーに移動し、

Nordic Society for Phenomenology Annual Conference “Phenomenology and the Body – Contemporary Perspectives” (NTNU, Trondheim, 15-17 June 2017) に参加し、Nordic-Japanese Panel: “The Phenomenology of Vulnerability – Birth and Ageing”を、シェル氏（スウェーデン・ストックホルム大学）、イリーナ・ポルシュチュック氏（フィンランド・ヘルシンキ大学）と、日本からの小手川正二郎氏（國學院大學）と稲原美苗氏（神戸大学）という四人で行った。その冒頭でオーガナイザとして浜渦が簡単に次のようなイントロダクションを行なった。

Eight years have passed since the first exchange between Japanese and Nordic phenomenologists. It has brought us Japanese phenomenologists a new exchange, one that is different from the one which we had with researchers from Germany, France and English speaking countries in preceding years. One of the difference seems to be due to the fact that Nordic countries are advanced countries with regards to welfare and caring, and that for this reason there are many researchers and lecturers who are women. We understand this difference as a phenomenological tendency which focuses on issues of vulnerability and the limitation of human beings. To research phenomenologically the wide-ranging problems such as birth, aging, disease, death, disabilities, pains, sex and gender, is an important task for us phenomenologists. By starting from the point of view of the person concerned (subjectivity), such a research will be expected to contribute to the clarification of issues in modern society and further issues such as the aging society and gender equality.

With this interest, in April 2016, we began a collaboration titled “Phenomenological Research on Vulnerability and the Limitation of Human Beings: A Collaborative project with Nordic Phenomenologists” with the financial support from the JSPS (The Japanese Society for Promoting Sciences). In connection with this project we would like to propose to open a “Nordic/Japanese Scholars Session” at the NOSP conference in 2017. Our project will focus on the theme of birth in last year and on the theme of aging

in this year.

For the session at the conference we would like to make a bridge between both themes with the following members:

Minae Inahara (Kobe University, Japan): “Philosophy Café Dialogues as the Phenomenological Foundation for a Feminist Exploration of the Lived World of Mothers Who Have Raised Children with Disabilities”

Irina Poleschchuk (Helsinki University, Finland): “Formation of Sensibility in Mother-Child Relation: Temporal Dephazing and Traumatic Displacement”

Shojiro Kotegawa (Kokugakuin University, Japan): “To Have a Child and to become a Parent”

Lisa Folkmarson Käll (Stockholm University, Sweden): “Intercorporeal Expression and Subjectivity of Dementia”

因みに、筆者自身には、このジョイント・パネルとは別に、Nordic-Japanese plenary session として、個人発表 “On Dis/Ability in Husserl’s Phenomenology” もする機会を与えられた。その原稿を加筆修正したものが、本誌に掲載されているので、参照されたい。

さて、ジョイント・パネルの最後に登場したシェルの発表は、ここに訳した原稿をもとに、そのエッセンス部分のみを口頭発表したものであった。それは、大変興味深い議論であるとともに、前述の「単なる喪失ではない：加齢に伴う認知症における自己のあり方」（『臨床哲学』第16号、2015年）からの展開となる議論でもあり、しかも口頭発表した短いものでは十分趣旨が伝わらないので、もとの論文を訳出して本誌に掲載する意義は大いにあったと考えた。

日本では、2014年頃から「ユマニチュード」というフランス生まれの認知症ケアが紹介され、マスコミで取り上げられ、各地で研究会なども開催され、広まっているようである。認知症の高齢者とのコミュニケーションを、「見る」「話す」「触れる」という具体的な手法から改善しようとするもので、「認知症の方が相手でも、『あなたは人間』で『そこに存在している』と伝えるのが、ユマニチュードの哲学です。この方法で、認知症の高齢者だけでなく、家族やケアに

関わるすべての人たちが、穏やかに過ごせるようになるのです」(ロゼット・マレスコッティ、本田美和子訳『ユマニチュード入門』医学書院、2014年6月)と謳っている。しかし、筆者には、この「ユマニチュード」というのは、特に新しいものとは思えず、10年前の2006年頃に英国から輸入されていた「パーソンセンタードケア」を具体的な手法を前面に出して目新しくしただけのように思われた(筆者自身、2015年に次のような講演を行った。“Intersubjectivity of Person-centred Care: a phenomenological perspective,” At Centre for Person-Centred Care (GPCC), 2015.09.22, University of Goteborg, Sweden)。

「パーソンセンタードケア」とは、従来の「医学モデル」に基づいた認知症の見方を再検討し、「認知症の主観性を研究する試み」であり、「ロジャースの心理療法にならって、『その人を中心としたケア (パーソンセンタードケア person-centered care) 』と名づけられたものだった(トム・キットウッド、高橋誠一訳『認知症のパーソンセンタードケア』(筒井書房、2006年)。2008年頃から、各地で「パーソンセンタードケア研究会」が開催されて広められてきている。さらにそれから5年ほど遡る2001年頃には、米国から輸入された「バリデーション療法」(本来なら「ヴァリデーション」と表記すべきところだろうが、「バリデーション」という表記で広まっているため、この表記のままにしておく)が紹介されていた(ナオミ・フェイル、藤沢嘉勝・篠崎人理・高橋誠一訳『バリデーション—認知症の人との超コミュニケーション法』、筒井書房、2001年)。これも、認知症の人とのコミュニケーション術として開発されたものだった。バリデーションとは「尊敬と共感をもって関わることを基本とし、高齢者の尊厳を回復し、引きこもりに陥らないように援助するコミュニケーション法」のことで、そこでも、「真正面に座って目を見つめる」「相手の言葉を反復する」「鏡になる」「共感する」「触れる」が強調されている。2003年には、公認日本バリデーション協会が設立され、セミナーが開催されてきている。このように数年おきに、海外からいろいろと新しい手法や考え方が輸入・紹介されて広まるが、一時期のブームが過ぎると、いつのまにか立ち消えになるということを繰り返しているように、筆者には感じられてならない。

シェル氏は、前稿「単なる喪失ではない:加齢に伴う認知症における自己のあり方」では、パーソンセンタードケアの議論と取り組み、本稿ではバリデーション

ョン療法の議論と取り組み、ともに、メルロ＝ポンティの現象学を手がかりにしながら考察し直す試みを行なっている。日本でも、これらの認知症ケアのあり方を単に目新しい手法として一時期のブームとしてしまうのではなく、腰を据えて、その根底にある考え方を哲学的に考察する、という作業が必要とされている。現象学に基づくシェルの論考は、こうした動きに刺激を与えるものとして歓迎されてよいだろう。

(解題：浜渦辰二)